



# 「夕焼け姫」3年生が栽培

東海市船島小学校の三年生五十七人が、県独自のかんきつ新品種「夕焼け姫」の栽培管理に取り組み。来春に苗木二百五十本を植え、肥料やりや草取りなどを体験し、三年後の卒業前の冬に収穫する。一日には、農家によるミカン作りの授業を受けた。実際に栽培する同校近くのは場も見学し、今春に植えられた夕焼け姫の木を観察しながら理解を深めた。

(福本英司)

## 東海・船島小 3年後の冬収穫へ

夕焼け姫は、市が産地化を目指して、二〇一九年度に同市加木屋町のほ場を整備し、試験栽培を行っている。他の



ミカン作りについて教える加古さん  
Ⓐと荒谷さん Ⓑ東海市船島小で

ミカンと比べて紅色が濃い品種で、一三年に品種登録された。

今回の取り組みは、ほ場近くの船島小の児童たちに、栽培を通して、ミカンや農業に親んでもらおうと市や学校などが計画した。講師は、ほ場で栽培管理を任される市マール栽培夕焼け姫管理部会の荒谷芳興部会長(Ⓐ)と、加古博之副会長(Ⓑ)が務める。

取り組みの最初として、この日、荒谷さんと加古さんが学校内で、野菜と果物の違いや、ミカンの栽培方法などを講義。加古さんは「太陽の光がしっかり注ぎ、温度が高く、雨が少ない東海市はミカンの栽培に適している。六年

## 「作った実 食べるのが楽しみ」

生になった冬に、自分たちが育てたミカンを、おいしく食べられるように頑張ろう」と声を掛けた。

授業の後、児童たちは、ほ場に移動し、既に育っている夕焼け姫の木を観察した。別の場所で収穫された夕焼け姫の試食もあり、一般的なミカンと食べ比べもした。吉田倅也君と喜多永哉君は「夕焼け姫の方が甘くておいしい」と声をそろえ、木下希音さんは「六年生になって、作った夕焼け姫を食べるのが楽しみ」と笑顔を見せた。

荒谷さんは「果物の実は勝手に、すぐに実るのではなく、人の手を加えることで、おいしくなることを、三年間の取り組みを通して感じてほしい」と話した。



紅色が濃い夕焼け姫(Ⓐ)と一般的なミカン―東海市船島小で

かんきつ新品種

夕焼け姫の木を観察する児童たち。手には、別の場所から収穫した夕焼け姫と一般的なミカンを持っている―東海市加木屋町のほ場で